

久米賞 佳作 受賞作品

名のない緑

郡山ザベリオ学園中学校

「暑ー。」

八月の容赦ない命の光が僕たちを溶かそうとしている。いつもはまわり付いて来る蚊も今日は暑さのあまりくたくたになってどっかについてしまった。植物を日陰に入れ、水をやった。

「行ってくる。」

「行つてらっしゃい。」

僕は自動運転の水素車に乗った。夏はクーラーのついた車なしでは命に関わるほど暑くなる。クーラーの中には二十六度に設定されている。僕は温度差でたびたび蕁麻疹を発症する。最近では地球温暖化の影響で数十年前より平均気温が五度以上も上がった。そのせいで氷河が小さくなり、海面は前よりぐっと上がった。水没してしまった国もあり、避難民の受け入れについての問題も起こった。受け入れた国では多くの失業者が出たという。日本の沖ノ鳥島も水没した。護岸工事も行ったが、それより海面上昇の方が早かった。ただでさえ魚が少なくなったのに、広大な排他的経済水域が失われたことにより日本の漁獲高は大幅に減った。寿司屋も少なくなり、本物の魚を出している店は少ない。本物そっくりのお

寿司の偽ネタを工場で作って、お寿司として出しているのがほとんどだ。本物を使っているところは値段が高い。生き物も大量に絶滅し、生態系は崩れた。豪雨などが多くなり、森が徐々に失われ、二酸化炭素を酸素にしてくれる植物が減ったためさらに地球温暖化が加速した。そうしてここまでひどくなってしまった。さらには永久凍土が溶け、シベリアの一角で建物が大量に倒壊するという今までになかったような災害が起きるようになった。また、溶けた永久凍土から病原体が長い眠りから覚め、世界的流行を見せている。今までに人口の十五パーセントが亡くなった。数十年前までは人口爆発が起こり、発展途上国を中心にとつてもない人数が増えたが、今は地球温暖化の様々な影響で人口が減少している。特に、餓死者が増えた。地球温暖化で作物が育たなくなり食糧不足に悩まされている。これから様々な影響でもっと減少することが予想される。

しばらくすると、学校に着いた。少子高齢化の影響で僕の市には一つしか学校はない。だから、遠くから来ている人も多い。

「おはよー。」

「おはよ。」

「昨日の数学の宿題やった？」

「やべっやつてない！見せて？」

「やっだー。」

「えー。」

「自分で考えなさいよ、得意なんだから。」

「めんどくさい。」

「見せないからねー。」

「ケチ。」

学校に着くと今日は珍しく幼馴染の朱音が先に来ていた。僕たちは幼稚園前から一緒にいる。たまたま参加した小さい子向けのイベントで出会う意気投合したのがきっかけだった。最近では前ほど話す回数は減った

が、今でも仲がいい。決していわゆる「リア充」なわけではない。いくら否定しても友達はやさしくしてくれるが。

「あーそれと、何か親戚のおばさんから椿の種をもらったからあげる。植物好きでしょ？」

「ありがたい！椿はつとほしかつたんだ！盆栽にしよう。」

「趣味がジジくさいね。」

「うるさい。」

「朝から夫婦げんか辞めろー。」

友だちの優斗に絡まれた。

「うるせー！そんなんじゃねーし。」

優斗も、僕と朱音と小さなころから遊んでいる幼馴染だ。やたらと人をいじるのが好きだ。

「そんなに否定するってことはそうなんだ？」

「そーじゃないから否定すんだよ！」

「正直にならな。」

「あーもううるせえー。」

あーだこーだ言ってていたら、いつの間にか朱音はどこかへ行ってしまうていた。

優斗がいなくなった後、もらった袋を見てみたらたくさん種が入っていた。

「始めるぞー席につけー。」

先生が来て授業が始まった。理科の授業だ。細胞分裂とか、減数分裂とか、生物についてだった。生物の單元には今この世界にはいない生物がいくつも出てきた。このカブトガニとかいう気持ち悪いのとか古生代とかそんな時にいそうなやつなのに最近までいたというのは驚きである。時速百キロで走れる猫や、マッコウの人間みたいな黒いやつとか。生き物をほとんど見えない世界で想像しろと言っても限界がある。もはや

勉強する意味はあるのだろうかと思うこともある。以前やった気象の勉強もよくわからなかった。昔は西高東低の気圧配置とか、日本海側は雪

が多く降るとか、決まりがあつたらしいが、毎年異常気象が起るため、

決まったものが少なくなり複雑になっている。ちなみに今まで僕はまだ

一回も本物の雪を見ていない。もう日本には雪が降る場所はない。冷凍

庫のような室内にあるガッチガチの白い氷は見たことはあるが、雪が柔

らかいなんて想像がつかない。

二時間目は技術の授業だった。技術の時間は自由席なため、いつも席

が変わる。しかも僕は授業開始ギリギリに行つたため、ほとんどの席は

埋まってしまうていた。一つ席が空いているところの隣には朱音がいた。

ちよつとうれいよう嫌なような。

「おそい。」

「しょーがないじゃん、先生に捕まつてたんだから。」

「なんかやらかしたの？」

「何も。」

「ホント？？宿題とかじゃないの？」

「あ、うん、ちがうよ。」

「凶星でしょ。バーカ。」

「うるさい。」

前方から二種類の視線が突き刺さっていた。優斗と先生からの。気ま

ずくなつて後は静かにしていた。でも、この席は悪くはないなと思つた。

全然そういう意味じゃないけど。

放課後は地下にある運動場で部活をした。僕は陸上部に所属している。

外はあまりの暑さに夏は運動ができない。ひどい時は十分ほど練習した

だけで熱中症になってしまう。だから、気象庁から出される外での運動

を禁止する警報があると地下のクーラーのきいた室内で練習をする。僕

はそんなに速い方ではないが、大会はもう県大会だ。僕が陸上部に入っ

た理由は、ただ走っているのが好きだからだ。生きてるって感じがする。今の地球の酸素濃度は二十パーセント弱。前は二十一パーセントだった。だからちよつと走っただけで息切れしてしまう。でも、何十年前前の人たちより心肺機能が強い自信はある。ちなみに学校では勉強がはかどるように酸素濃度を調整する装置がついているため快適だ。でも、外では若干眠くなる。現在日本では二酸化炭素の排出量は非常に少ないが、発展途上国などからの汚染された空気が運ばれてきているため、前よりも空気は濁っている。だから走るときは専用のマスクをつけて走る。つけていても全然息苦しくなく、透明なものだ。考えてみると外でマスクなしで深呼吸をしたことはほとんどない。親からは外では絶対マスクを外さない様に、とどの家庭でも教えられている。全然苦しくないハイテクなマスクが開発されたため体育の時間とかも、運動するときもマスクを外さなくても危険ではなくなった。

軽くダウンをした後家に帰った。

「ただいま。」

「おかえりー。」

家に帰ると、先に妹の歩美が帰っていた。珍しくテレビがついていた。災害の中継らしい。目を疑った。たくさんのビルが倒れ、あちこちで火災が起こっていた。

「なんか外国で大きな地震があったんだって。」

『えー、今現場の上空からお伝えしています。今日日本時間午後一時頃この地でマグニチュード八・七、最大震度七の大地震がありました。直後に津波も押し寄せ、多数の犠牲者を出しました。六十年前に起こった東日本大震災に匹敵するほどの地震です。死者は現時点で二万人を超えと言われています。見るとわかりますが、ビルが倒壊し、その地震の大きさを物語っています。崖崩れも起ー』

「大変だね。ていうか、東日本大震災ってそんなに大きかったの？」

「そうらしいよ。地震そのものも大きかったし、そのあとに二次被害が特にひどかったみたい。よくおじいちゃんおばあちゃんが話してた。津波の後に原発事故、風評被害、とにかく大変だったんだって。」

「そうなんだ。今は福島はわりと都会だよ。」

「六十年前だもんね。もうとつくに復興してるよ。今おじいちゃんたちの世代が子どものころだったって考えるとけっこう経ってる。」

「ふーん。」

「ごはんにするわよー。」

「はい。」

今日のご飯はカレーだった。僕の好物だ。

「いったただきまーす。」

「召し上がれ。」

ご飯を食べた後、明日の準備をしたとき、朱音からもらった種が出てきた。中には十二粒の種が入っていた。僕はそれを植物の手入れ用品の箱に入れておいた。いつか時期になったら植えよう。その先を考えるとうきうきした。最初は心配だった外国の地震も、何時も通りの生活をしているうちに忘れてしまっていた。

次の日もいつものように学校へ行った。この先僕たちは一生こんな生活をしなくてはならないのかと考えながら車に乗った。外に眺める景色には一面住宅地しかなく、緑が少ない。あるにはあるが、とても森などと比べるとほんのわずかしかない。学校に着くと、今日も朱音が先に来っていた。

「昨日の地震見た？」

「あー、見た見た！大変だよ。」

「今日も竜巻注意報出てるし、気をつけなきゃ。」

「だね。」

正直この時は他人事だと思っていた。

そしていつも通り授業を受け部活をして、いつも通り帰って、何時も通り寝た。しかし、そんな日に限ってこれは起こった。突然轟音が鳴り響いた。前にも聞いたことがある音。竜巻がやって来た。いつもは竜巻が来ても最近の家は頑丈なため並大抵ではびくともしない。しかし、今日のは明らかに威力が桁違いなのが音でわかった。と、家がぐらつと揺れた。やばいと思った。脳裏に昨日の外国の地震が思い浮かぶ。ビルが倒壊し、巨人が踏み荒らした後みたいになった惨状。電か何かが窓にぶつかった。窓にひびが入った。とつさに頭を守り丸まった途端、窓ガラスが粉々に砕けた。目を見張った。ついさっきまで灼熱の太陽の照り付ける夏だったのに。外には吹雪が吹き荒れていた。そして町の至る所に漆黒の柱があがっていた。僕にとつて雪との出会いはあまりにも悲惨だった。そこにはふわふわとした雪原のイメージはもうない。肌を突き刺す冷たい結晶。中に風が入ってきたせいで屋根がとび、風に持ち上げられるように、とつてもない力になすすべもなく家は倒れて行った。

どのくらいたつただろうか。気がついたら広いところにいた。シェルターだろうか。隣にお母さんがいた。頭には包帯が巻かれていた。僕の記憶とはあまりにもかけ離れた安全がそこにあった。

「目、覚めた？痛いところはない？」

「うん、大丈夫。」

そこは僕がいたのは簡易ベットのようなものだった。見渡してみると、多くのけがをした人が横たわり、その間を医者や看護師たちが右往左往していた。自衛隊の姿もあった。ふと、壁についているテレビを見ると、災害の中継だった。あの外国のやつかと思つた瞬間、僕は目を疑った。家の近くの公園にある大きな木があった。しかし葉っぱがなく、周りに

は知らない町が広がっていた。巨人に踏み荒らされた後のような悲惨さ。廃墟となり鉄筋コンクリートがむき出しになって、知っているようで知らない町。さらに驚いたのは、竜巻はあの周辺の広範囲にわたつて幾つも現れ、町を飲み込んだということだった。普通はこんなになるはずはない。なるわけない。しかし、現実ではなっている。直感で思つたのは、地球が怒っている。人のために破壊された環境の報復を行っている、だった。最近の災害の数は尋常じゃない。後から知ったことだが、この騒動は全国で何か所も発生したという。外国でも。

「ねえ、ほかのみんなは？」

「歩美ちゃんが大けがしちゃつて、お父さんはその付き添いに行つてる。取りあえず命に別状はないから心配する必要はないよ。」

「大丈夫なの？でも、取りあえず生きててよかった。」

僕は、頭を打つたらしく、包帯でぐるぐるになっていた。あの時、家は崩れたそう。お父さんは県外へ仕事に行つていたため無事で、お母さんと歩美は一階にいたが、倒れた方向とは逆だったため何とか無事だったという。僕は家から投げ出されたが、奇跡的にこの傷で済んだそう。

「そういえばさつき優斗君をみかけたわよ。結構元気そうだった。」

「よかった。なんか言つてた？」

「起きたら、呼んでつて言つてた。今呼ぶね。」

「分かった。」

数分後に優斗は来た。ところどころ擦り傷はあるが、比較的元気そうだった。

「大丈夫だった？」

「見ての通りだけど・・・。」

「まあ、取りあえず大丈夫そうだね。で、話があるんだけど、今日の朝、クラスのやつ全員に安否確認したんだけど、ほぼ全員返事が返つてき

た。」

「ほぼ?。」

「そう。朱音と連絡がつかない。」

「えっ。」

胸騒ぎを覚えた。けど、まだ連絡できていないだけだと自分に思い聞かせた。きつと忙しくて携帯見てる余裕がないに違いない。

「まあ、今日の朝だから忙しいのかもしれないからそこまで心配しなくていいと思うんだけど、電話をかけてみてもコール音はするから、繋がってはいらぬ。でも電話に出ない。」

「大丈夫かな。」

「大丈夫だと思っけどちよつと心配。」

もし何かあつたらと考えると胸が締め付けられる。無事でいてくれ。

数日後、僕たちは家の跡地にいったん戻った。避難指示が一時的に解除され、貴重品などを持ち出していいという許可が出たからだ。僕は医者に診てもらい、外出許可が出たから、お父さんと戻った。お母さんは歩美の付き添いだ。家の跡地には、瓦礫が散乱していた。近くに、瓦礫に挟まって土が出てしまった僕の紅葉の盆栽があつた。最近は雨続きだったため根っこは乾いていなかった。まだ生きている。土で丁寧に根っこを包み、もともとあつた鉢植えに植えなおした。あの暴風の中でここに残つててくれたのは奇跡だった。瓦礫に挟まっていたから飛ばされずに済んだみたいだ。しかし、枝は何本も折れていた。応急処置をするために植物手入れ用品の箱を探した。しばらく物色した後、見つけて取り出した。そこには朱音からもらった椿の種が入っていた。あの後朱音との連絡はまだつかないままだ。家も遠いし、電話をかけてもつながらない。日に日に心配は増していった。ここ数日、僕は気づいた。僕は朱音のことが好きだ。小さいころから一緒にいる絆とは違う、また別な

感情があつた。優斗に冷やかされたとき否定するんじゃない。実は前、友達から朱音は僕のことを好きだと聞いたことがあつた。だから、なおさら悔しい。どうしてわかつておきながらあんな態度をとつてしまったのだろうか。何も考えたくなくなった。だから、黙々と無心に手を動かすことにした。傷口に塗るロウを出し、傷口に塗つてやった。水もたつぷりやり、取りあえず持ち帰ることにした。

家はなくなつてしまった。しばらくはあの町に帰ることはできない。どこかに避難するのだろうか。またここに戻つてくれるのだろうか。果たして避難したところは安全なのだろうか。またこんな怖い思いをくりかえすだけなのではないか。

結局、僕たちはしばらく避難所で生活をしたが、歩美の回復を待つてから親戚のうちにしばらく泊めてもらうことにした。朱音と連絡もつかなかった。ほとんどを飛ばされ、失った。あの竜巻は地球温暖化の影響ではないかとのことだった。それを聞いた時、やはり、という気持ちと、憤りを感じた。どうして僕が生まれてきたこの世界はこうもあれているのだろうか。僕はよく自分用に用意してくれた部屋にこもつて考えた。どうして昔の人はもつと環境に配慮してくれなかったのだろうか。僕の責任じゃないのに、どうして僕がこんな思いをしなければならないのか。どうして—

「どうしてだよっ!昔の人はバカか!ここまで地球温暖化を進行させておいて、どうして将来のことを考えなかったんだ!」

「そうじゃない。先人がいたからこそ今君は生きている。だから、ご先祖様たちは敬いなさい。」

「嫌だ!だつてそうじゃない!こんな状況にしたのはその人たちなんだよ!こんなんだつたらこんな世界いらぬ!」

「そういうこと言うな!確かに地球を汚したのはそういう人たちかもし

れないけど、君たちだって地球を汚してる！」

「だってこういう世界の仕組みなんだからしようがないじゃん！」

「君は今まで節約とカリサイクルだとか、意識したことある？地球環境のために努力したことある？」

「っ、あんまりないけど、でもっ。」

「でもじゃない。そんなら地球を汚しているのと何も変わらないだろ？」

「・・・。」

「先祖のことを恨んではいけない。そうやって何もしなかったら君の子孫にも同じ思いをさせることになる。過去じゃなくて現在と未来。今少しでも自分にできることをやって、少しでもいい環境を後世に伝えようとする努力をする。これが一番大切。」

「何で僕たちが・・・。」

「そうやって逃げるな！人は人間が繁栄しだしてから何も変わってない。ただ、先人たちも少しでも子孫が便利に生活できるように頑張ったけど、結果的にそうなってしまっただけ。蛇口をひねったら水が出るって、災害の後速やかに人命救助ができるのって、そういう人たちの努力のおかげなんだよ。だから、これからは君たちが環境を改善する努力をする番。それをしなかったら生まれてきた意味はない。」

僕ははっとした。確かに、いままで僕は逃げていたのかもしれない。これまで生きてきた人々たちを責めることは出来ない。

「じゃあ、どう、すればいいの？」

「自分で考えな。僕たちは動けないけど二酸化炭素を酸素にするくらいはできる。僕たちも頑張るからさ、君たちも頑張って。」

「わかった。」

今自分にできること。小さいことかもしれない。もしかしたら自分一人では何も変わらないかもしれない。でも、今までにはここまで発展し

た文明には頑張ってきた名もなき人たちの努力の結晶がある。自分も、結果は変えられなくても自分なりにできることを努力してみようと思っ

た。

「それでよし。てか水ちょうだい。声出して喉乾いた。」

「喉って乾くの？」

「わかったよ、はい。」

「サンキュ。」

十一月、僕は朱音からもらった十二個の椿の種を植えた。僕にできること、まずは環境に配慮した商品を買ひ、エコな生活をする。あとは、少しでも緑を増やそうと思った。椿の苗木をあちこちに植えることを思いついた。最近人口減少のため誰のものでもない荒れた山などが数多くある。役所に許可を取ればそういうところに少しずつ植えることができるだろう。種は毎年どこからか買うしかないが、今年は初めてだからもらった種を使った。

春、芽が出た。嬉しい事に十二本全部が出た。水をやり、肥料をやり、精一杯お世話をした。僕たちの汚してしまった地球の掃除を手伝ってもらうため、思いを込めて育てた。何よりも大切に育てた。その間も、いろいろの植物の種や苗を買ひ集めた。取りあえず親戚の家が農家で、使っていない土地を使わせてもらって花とかを植えて行った。スーパー樹木という、二酸化炭素の吸収率が通常のものよりも高いように品種改良されたものについても調べ、苗を手に入れた。そして育てている。自分でできること、それを実践していった。

遂に最初の苗木を植える日がやって来た。役所に許可を取り、今ではすっかり木の少なくなった山に植えることになった。一つ一つ丁寧に植えた。水をあげ、肥料もやった。そして、少しでも成長しやすいように

枯れた木の枝をできる範囲で払った。大きな幹を撤去するのに今度業者に頼まなければいけないかもしれない。

しばらくしてから僕は、この植林のことをSNSなどで発信した。少しでも多くの人に地球温暖化の対策をしてもらいたいと思った。そうしたら、たくさんの方から賛同してくださった。仲間も増えた。新聞やテレビで紹介してもらい、寄付を集めた。そのお金を使って木の苗木を買って植えた。植林を始めてから数年でもう述べ一万本以上の木を植えた。海の中の海藻の移植もした。新たにスーパー樹木の開発もして、環境に悪い影響がないような今までよりも地球温暖化の防止に役立つスーパー樹木の開発などもした。他に、外来種を入れないようにというところも考えた。自然が戻ってきた後に生態系がまた崩れてしまつては意味がないからだ。こんな中で、僕は一度も表舞台に立つたことはない。新聞の取材も、いつも別の人がやつてもらっていた。自分は、当たり前のことをやっているだけだと思つたから、とにかく自分の名前は出さなかつた。それが僕の信念だつた。木を植え、少しでも地球の環境がよくなるようにと願つた。

たくさんの人が「朱音の木」に来ていた。十一本の樹齢数百年の樺の木がある。地球温暖化から地球を救うプロジェクトの最初の植林のプロジェクトの最初の場所と言われている。地球を救うきっかけとなった原点。ここが無かつたら今地球は滅んでいたかもしれない。なぜ「朱音の木」と呼ばれているかは、この木を植えた人の奥さんの名前が朱音で、その奥さんからもらつた種を植えたからであつた。あのプロジェクトがきっかけで、世界中の人がいろいろな地球温暖化対策を行い、今では二十一世紀ごろとほぼ変わらない環境になつていた。昔環境が荒廃していたとは思えないくらい自然が広がっている。今や発電は完全に再生可能エネルギーを使つていて、二酸化炭素の排出量は限りなくゼロに近

い。車は宙に浮いていて、道路が撤去されたところもあり、雑草などが生え、緑が多かつた。近代的ではあるが、大昔に戻つたような世界が広がっていた。今も森林面積は徐々に広がっており、さらに氷河もまた復活した。海面が下がって数百年前の都市が現れて、海底都市として一躍話題となつた。クロロンの技術などによりかつていた生物たちを復活させようという取り組みもあり、自然と共存するべき姿の人間社会が広がっていた。

(指導教諭／柳 沼 とも子)

《作品の意図》

僕は、植物を育てるのが好きで、植物がテーマの作品を書いてみたいと思ひました。また、学校のSDGsで地球温暖化について調べたので、この作品を思ひつきました。

《作品の寸評》

地球温暖化の影響で変わってしまった近未来の日本を描いた作品である。SF小説を彷彿させる仕上がりになっている。自動運転の水素車、漁獲減少による偽ネタの寿司、雪が降らない冬、マスク着用での運動、そのマスクも息苦しくないハイテクな透明マスクなど興味深く読み進めることができた。その中に、少子高齢化による廃校や、自分たちの情報をSNSで発信することなど、温暖化以外のことも織り交ぜてあり、広い視野で作品に取り組んだ姿勢が感じられる。

幼馴染の朱音と優斗を登場させたことで、作品に深みを与えている。「僕」を含めた三人のやりとりが、中学生らしく、読んでいてほほ笑ましい。

学校の授業で学習した内容を題材に取り上げた点を評価したい。

(審査員／宗 形 幸 子)